

1. 流域及び河川の現状と課題

1.1 流域及び河川の概要

1.1.1 流域及び河川の概要

豊川は、その源を愛知県北設楽郡設楽町の段戸山(標高1,152m)に発し、山間溪谷を流れて当貝津川、巴川等の支川を合わせて南下し、愛知県南設楽郡鳳来町長篠地先で宇連川と合流し、その後、豊橋平野で宇利川、間川等の支川を合わせ、豊川市行明で豊川放水路を分派し、豊橋市内を流れ神田川、朝倉川等の支川を集めた後、三河湾に注ぐ幹川流路延長77km、流域面積 724km² の一級河川である。

その流域は、愛知県東部に位置しており、愛知県で名古屋市に次ぐ第2の都市であり、また東三河地域の中心である豊橋市をはじめとする3市4町2村からなり、東三河地域における産業、経済の基盤となっている地域であり、東海道新幹線、東名高速道路、三河港等の重要交通基盤が整備されており、第二東名高速道路や三遠南信自動車道が事業化されるなど、今後、益々の発展が期待されている地域である。

豊川流域の地形は、北西部に広がる標高600～700mの起伏の少ない三河高原と、東側に連なる標高400～600mの急峻な弓張山脈に挟まれた地形を基盤に形成されている。下流域の豊橋平野は、東西両山地の間に形成された三角州、扇状地の平地であり、山地の麓には低い小坂井台地と豊川左岸段丘があり、その間が河川氾濫原の豊川低地となっている。

豊川上流部は大部分が森林に覆われ、流域内の年間降水量(昭和36年～平成9年)は上流域で約2,400mm、中流域で約2,200mm、下流域で約1,800mmあり、全国レベルで比較すると多雨地域に属しており梅雨期及び台風期に降雨が集中している。

豊川流域及び利水地域の市町村は5市9町2村あり、人口は約79万人(平成12年)であり、上流域に約2万人、中流域に約17万人、下流域に約39万人、利水地域に約21万人が生活している。人口の推移を見ると、過去10年間(平成2年～平成12年)で、上流域では約9%の減少を示しているが、利水地域ではほぼ横這い、中流域では約5%、下流域では約8%の伸びを示しており、全体では約4%の伸びを示している。

注) 平成2年、平成12年の国勢調査による。

上流域：設楽町、鳳来町、作手村

中流域：豊川市、新城市、一宮町

下流域：豊橋市、小坂井町

利水地域：蒲郡市、音羽町、御津町、田原町、赤羽根町、渥美町、静岡県湖西市

津具村は、沿川市町村人口に含まず。

豊川流域の面積(724km²)は、愛知県全体の約14%を占める。沿川市町村の土地利用の現況は、愛知県全体に比較して森林・原野の占める割合が64%と高く、逆に宅地の占める割合は、8%と低くなっている。

東三河地域の中心である下流部の豊橋市、豊川市等は臨海部から内陸部にかけて工業地化、宅地化が進み、地域開発とともに土地の高度利用の進展が見られ、その影響は中流部の一宮町にまで及んでいる。また、本地域は、東三河工業整備特別地域、東三河地方拠点都市地域、都市開発区域などを擁しており、第二東名高速道路や三遠南信自動車道等の交通ネットワークの整備に伴い、愛知県の東部の拠点として、今後一層の発展が期待される地域である。

豊川流域を中心とする東三河地域の主要産業は、生産性の高い農業（メロン、スイカ、電照菊などの施設園芸）や輸送機器産業（自動車等）、食料品産業（ゼリー、ちくわ、おこし等）などで、沿川市町村及び利水地域の生産額は、農業粗生産額約1,866億円（平成10年愛知農林水産統計年報）、製造品出荷額約43,643億円（平成10年工業統計表）で、特に、豊橋市の農業粗生産額は約578億円（平成10年愛知農林水産統計年報）に達し、市町村単位では、全国第1位となっている。このような産業形態を反映して、産業別の就業者数は、第1次産業・第2次産業の占める割合は全国平均と比較して高くなっており、逆に第3次産業は全国平均と比較して低くなっている。

交通機関については、国鉄(現JR)東海道本線が明治21年に開通後、昭和2年には愛知鉄道（現名古屋鉄道）が豊橋まで開通し、昭和39年には東海道新幹線が開通しており、これらは現在も名古屋、東京方面と豊橋を結ぶ動脈となっている。道路では国道1号、23号、151号等が流域内の主要都市を結んでいる。昭和44年には東名高速道路が全通し、豊川インターチェンジを中心に、流域は急速な発展を遂げた。現在、第二東名高速道路、三遠南信自動車道が事業化されている。

注）農業粗生産額は、農業生産額から農業へ再び投入される種子、飼料などの中間生産部分を控除したものである。

